

## モスクワにおける非ロシア人

—新しい発達文化の創造の兆し—

### 一 モスクワにおける非ロシア人の歴史

モスクワは現在ロシア連邦の首都であり、ソヴェト連邦時代は中央集権の指令基地であった。モスクワに長く住む人々は、自分たちのことをモスクヴィッチという。誇りと自信が入りまじったような響きがある。さしずめ日本でいう江戸っ子といったところだ。ロシア人かどうかよりも、そこに生れ育った人々をさしている場合が多く、したがって非ロシア人のモスクワっ子たちも少なくない。一九八九年の調査によれば約百万人のモスクワっ子は非ロシア人だといわれている。<sup>(1)</sup>

ロシア帝国時代からモスクワは多文化・多民族都市であった。一五世紀には外国人の職人・技術者が招かれ、

### 関 啓 子

寺院の再建などにあたった。同世紀後半にウスペンスキ―寺院を現在の形に立て直したのも、一六世紀の初めにクレムリンのアルハンゲリスキ―寺院を立てたのも、同一人物ではないが、イタリア人の技術者である。<sup>(2)</sup> 技術者の外国からの招聘を生業にするものまで登場した。最初はクレムリン内に住んでいた外国人も数が増すとともに、市内に住みつくようになり、やがて一六世紀初めモスクワに外国人村が生まれた。一七世紀のモスクワの住民は、さまざまなエスニシテイをもつ人々によって構成されていた。<sup>(3)</sup> ヨーロッパの民族が西方から入り、ロシアのヨーロッパ化、近代化の促進に一役かったのである。軍人や技術者、職人、商人、医師、薬剤師などが招かれ、ややまとまって生活していた。ピョートル大帝が頻繁に足を

運んだことで知られるドイツ人村は、さながらヨーロッパに向けて大きく開かれた窓であった。ドイツ人だけが住んでいたわけではないが、かれらをはじめとする主に西欧からの人々が住むところであった<sup>(4)</sup>。

ヨーロッパからの外国人たちは、ロシアの時の権力者が自らの権力を誇示するために、さらには近代化・西歐化を促進するために不可欠の専門家として招かれた。つまり、権力者が繁栄するために、異文化をもつ人が必要であったのであり、当然共存が前提であった。近代化政策が優先されたあまり、外国人たちは特権を付与されるなど優遇措置に浴することができた。もちろん、財産没収といった厳しい措置がとられることもあったから安定していたわけではない。宗教的寛容や特権の付与といった外国人優遇政策は、ロシア人商人や宗教関係者にとってもおもしろいわけがなく、かれらは外国人に対して強い反感を覚えるようになる。その結果、一六五二年には外国人隔離政策がとられることとなった。しかし、隔離される側からすれば、自らの文化様式を維持できるので、それほど気詰まりなものでもなかったようだ。外国人は、粗末な木製の小屋に住むなど、生活のハード面はロシア

的だが、宗教などのソフト面では自文化をかなり維持できたようである。隔離は徹底的に実施されたわけでもなく、外国人村に住むロシア人もいた。外国人の数が増し、やがて都市の拡大とともに、混住状況が広がっていく。

さて、ロシアへの移住者の研究はほとんどが西欧からロシアに入った人々をめぐるもので、とりわけドイツ人やドイツ人村にかかわる研究がいつも盛んである。西歐化路線に研究の関心があればしごく自然な成り行きだが、ロシアに移動したのは西欧からの人々ばかりではない。アルメニア人のロシアへの移動の歴史も古いし、東方からのタタール人の移動もロシア社会の歴史に不可欠である。「タタール人がモスクワに現れるようになったのは一五世紀で、ザラタヤ・オルダーからの移住者であった<sup>(5)</sup>」。モスクワのタタール人口は年々増え続け、モスクワ市の南部に居留地としての土地をあてがわれた。かれらは兵役で活躍し、その位置を確かなものにしていった。まず、一四〇八年の勲功によって、モスクワのタタールの認証をえ、一八一二年の英雄的な活躍によって居留地にメチエチ(イスラーム寺院)を立てることを許された<sup>(6)</sup>。これをきっかけに、モスクワ・タタールの状況は好転し

た。なぜなら、子どもたちがメドレセで学び、祝日のお祝いもできるようになったからである。タタール人たちは軍人として活躍するばかりでなく、馬の商い、通商さらには通訳などの業務に就いていたし、俗にいう3K労働にも従事してきた。現在全モスクワ住民の一・七七%がタタール人である。<sup>(7)</sup>

非ロシア人が住んでいたことをしのばせる通りや地区の名前は、多民族都市モスクワの歴史の一頁を物語っている。それは職業名と重なる場合もあり、職業名の通りの名前に漂うのは、職人や非ロシア人の名残である。<sup>(8)</sup> 通りの名前についての考察は別稿で扱いたい。

ソ連邦時代になると、旧ソ連邦構成共和国から民族エリート候補者たちが招かれ、学ぶ機会をえ、他方では、都市運営に不可欠の季節労働者などがモスクワに集まるようにもなった。また世界中の社会主義圏の専門家養成を引き受けたこともあり、七〇年代をとってもモスクワはあたかもさまざまの人種・民族の集合地の観を呈していた。かれらは数年間はモスクワに暮らし、学び、専門家となって帰国していった。

ソ連邦崩壊後は、ウクライナなどの独立した旧連邦構成共和国からの出稼ぎ労働者がモスクワに入り、建設現場などで働いている。建設労働者にはトルコなどの旧構成共和国外からの人々もいる。出稼ぎ労働者数は、経済危機のためにモスクワでの仕事が減少したので一時期ほど多くはない。なお、本稿では、定住非ロシア人のみを考察することとする。

ソ連社会主義は、革命期から民族の自立を看板に掲げ続けていたから、例えば、機会均等という観点から全民族に平等の教育制度を実施するなど、制度的民族差別を避け、民族学校までも認めていた。しかし、旧構成共和国のつくられ方、スターリン政権による国境の策定や民族移住はかなり強引なものであったから、一四のソ連邦構成共和国の名称民族の内には強い不満が蓄積されていった。

旧ソ連邦内の非ロシア人たちは、バイリンガルとなって民族語を維持してきた。すなわち教授用言語はほとんどがロシア語であったが、民族語は、公教育とは相対的に自立した人間形成の過程で、すなわち家族や地域での産む・育む・祝う・老いるといった生活世界で日常的文

化と切り結び生き続けた。

教育場面でのロシア語化の進展と徹底は、権力の強制によるものではなかった。学習者と父母の選択により進展したのである。こうした教授用言語の選択制度の導入は、フルシチョフ改革によってもたらされた。制度による教授用言語のロシア語化ではないにしても、非ロシア人にとってみれば、子どもたちに将来の進路の選択肢を豊かに保障しようと思えば、ロシア語を教授用言語とする学校を選ばざるをえなかったのである。ロシア語は大学進学のために必要なばかりでなく、外国語の学術用語の訳語はロシア語であったし、文献もロシア語のものが圧倒的に多かったから、学歴による社会進出を狙うとすれば、ロシア語をマスターするしか道はなかった。だから、高学歴志向者にしてみれば、選ぶも選ばぬもなく、ロシア語の学習は不可欠であったのである。

非ロシア人に蓄積された不満は、やがてソ連邦の解体へと突き進むこととなる。ソ連邦の崩壊を準備したのは他ならぬ連邦の教育政策であった。ソ連邦政府が力を入れた教育の量的発展政策は、旧ソ連邦全域の人材養成に一定の成果を挙げ、さまざまな民族の知識人層の形成

を促した。この層の厚みが各地の民族戦線の活発化を可能にし、旧構成共和国の独立が準備されたのである。独立後すみやかに、かれらからすればようやく、民族の言語が教授用言語に返り咲いた。

## 二 ソ連邦崩壊の前後にみる民族間葛藤の

ありよう

モスクワのロシア人に教育にかかわる民族問題についてたずねると、大概は民族差別は社会主義時代になかったし、体制の変わった今もないと答える。旧体制の崩壊を歓迎する改革派にしても、そうでなくてもこの点ではほぼ一致している。

異民族間結婚が少なくないので、混血化が進み、純粋のロシア人などいないと等しいと断言し、非ロシア人の存在を打ち消してしまうロシア人もいる。非ロシア人が非存在化されてしまえば、民族問題も存在しなくなる。エスニック・マイノリティが抱く痛みに聞く耳もたずといったところであるが、ここにはロシア社会で民族問題を考える際に注意すべき二つの側面が隠されている。一つには、異民族間結婚は少くないのが事実だが、それに

表1 中心民族および他の民族の人口比率と異民族間結婚の比率(%)

上段 旧構成共和国名 下段 そこに住むロシア人	中心民族の人口比	他の民族の比率	異民族間結婚	
			1989年	男性
ロシア	81.5	5.1	9.7	11.1
ウクライナ ロシア人	72.7	23.9	57.2	56.7
ベラルーシ ロシア人	77.9	16.4	74.5	73.4
カザフ ロシア人	39.7	47.7	24.3	27.1
ウズベク ロシア人	71.4	20.1	24.0	29.6
ギルギス ロシア人	52.4	39.4	19.4	23.0
タジク ロシア人	62.3	34.2	26.0	31.9
トゥルクメン ロシア人	72.0	24.3	27.2	34.9

は傾向性があるということだ。ロシア人とウクライナ人、ベラルーシ人の間の結婚は多い。かれらはスラブ系民族であり、ロシア正教が優勢な地域に住む。他方、旧ソ連邦内のムスリムの場合、異民族間の結婚は、タジク人と

ウズベク人というようにムスリム同士の結婚が多い。<sup>(10)</sup>また、上の表1<sup>(11)</sup>にあるように、各地域でのロシア人の異民族間結婚比率は低くないから、ロシア人の血統をひく混血が増え続けていることになる。ロシア人による非ロシア人の非存在化の根拠がここにある。

いま一つは、人間関係や交遊関係を楽しく円滑なものにするのに民族という要素は規定的ではなく、むしろ話題の共有が自然な階層・階級という要素の方がはるかに重要だというミドル・クラスの意識である。多文化社会に慣れ親しんだ人々は、発達文化<sup>(12)</sup>(子育て、ひとりだちの意味とひとりだちへの算段、すなわち伝達内容「知識・技術・規範など」、何語でどのように伝達するか、伝達の手段、伝達機能を果たす機関、伝達の際の人間関係のあり方など)の類似性、生活スタイルの類似性は民族というファクターよりも階級というファクターによって規定される、とみている。

ところで、モスクワに住む非ロシア人たちも、いままです制度的差別はなかったと、ライフヒストリーをふりかえる。かれらはいまも教育機会の均等といった制度的平等はほぼ適えられているとするが、ロシア人の非ロシア

人へのまなざしは時としてきつくなつたと語る。

ソ連邦崩壊の前と後では、モスクワにおける民族間葛藤のありように変化が見られるようだ。以前よりも民族間の葛藤が強く感じられる、というのが結論である。居住都市における民族間関係の今日的状況をめぐる一九九二年と一九九四年の調査を比較すれば、モスクワでは「安定」と答えた人の割合が、三二%から二一%に減少し、「緊張」という回答が三四%から四九%に増加している。ただし「強い緊張」の指摘は一七%と変化していない。事件といった具体的なコンフリクトの存在というよりは、日常感覚の緊張感がひたひたと感じられるということのようだ。最近の調査でもこの傾向は裏づけられる。一九九八年に一六〇六五歳未満の全国三千人を対象とした調査<sup>(14)</sup>によれば、革命前、スターリン時代、ブレジネフ時代そして現代ロシアを比較した場合、民族間の葛藤が一番高いのは現在であると回答した者の割合が、断然高く八五・九%に達した。因みに、革命前との回答は五・四%、スターリン時代を選んだ人は七・三%、ブレジネフ時代と回答した割合が一番低く、三・八%であった。モスクワに住む二人のチェチェン人にインタビューし

た。その一人は商業活動に成功し、かなり経済的には豊かである。子どもたちを高等教育機関に通わせようとしていた。夫婦共にチェチェン人で、妻はロシア語がうまくなりたいと言うが、流暢そのものである。夫は世間話をして居る時はざっくばらんで、くつろいだ場面では友人たちとロシア人を笑いの種にして楽しんで居るが、本格的なインタビューとなると、当たり障りのない答えに腐心する。彼の語りからは、ロシア人から差別をうけていると思われては困るところに最大のこだわりがあることが読み取れる。彼のこの気がかりは、マジョリテイであるロシア人との関係性をよく示している。もう一人のチェチェン人は政治家であり、少数民族の集いで一緒になったが、彼ははっきりと少数民族への風当たりの厳しさを告発した。

もう一つ、一部の非ロシア人への蔑称の広がりからも、制度という表層の下に激む民族間の葛藤が新たな局面をむかえていることが感じられる。ユダヤ人は、周知のように帝政ロシア時代より差別に苦しんできた民族であるが、かれらは<sup>(15)</sup>と誇りをこめステレオタイプ化されてきた。ところが最近では、チェチェン人とアゼルバイジ

ヤン人を、*чёрный* (下層民) からは *медведь* (獣野郎) と名指しすると聞いた。特別の意味をもって差異化されるもう一つのグループが形づくられつつあるわけである。同じザカフカスの民で、同様に紛争がらみでも、アルメニアやグルジアの人々が *медведь* とは名指しされないのは、かれらの宗教がロシア正教と親和的關係にあるからであろう。

なお、ユダヤ人もザカフカスの人々も、いずれも商業活動に精を出す。商業活動にかかわるエスニック・グループに対する敵意が、エスニック・コンフリクトの大きな原因となっているとの指摘もある。<sup>(15)</sup>

新しい民族間関係の緊張はなぜ起こりつつあるのだろうか。まず、大前提は、ロシア連邦全体からすれば、連邦崩壊以前に比べはるかにロシア人の比率が高まったという事実である。現在ロシア連邦のロシア人人口は八二%で、「ロシア(民族国家)論の下地となっている。<sup>(16)</sup> 旧ソ連邦を構成してきた共和国が独立したことで、名称民族が独立した祖国に戻ったことによる。非ロシア人は、前にもまして文字通りマイノリティになったというわけである。

ソ連邦の崩壊は、ロシア人に直接的に優位感をもたらしたわけではない。崩壊はかれらにとってもアイデンティティの揺らぎを招いた。一部のロシア人は連邦崩壊で揺らいだ自信を大ロシア主義によって立て直そうしたのである。連邦解体と同時に非ロシア人が恐れを抱いたのは、大ロシア主義の台頭であった。かれらの予想通り、アイデンティティの再構築を迫られたロシア人たちが頼ったところは、大ロシア主義とロシア正教であった。大ロシア主義の台頭は、非ロシア人モスクヴィッチに民族間の緊張の深まりを感じられることになった。

大ロシア主義的な民族主義の特徴の一つは反ユダヤ主義である。「今日のロシア社会における『反ユダヤ主義』の広がりには、かつてのようになら上から、つまり国家権力が意図的につくり出したものではなく、下からの風潮となっている点に留意する必要がある<sup>(17)</sup>」との指摘は、ユダヤ人が抱きつつある緊張感を想起させる。

すでに指摘したことだが、市場経済化した社会で商業活動を主な生業とする民族に対して敵意が抱かれるのは、経済改革の失敗と社会の混乱が多くの人々に生活難を強いているためでもある。

### 三 非ロシア人のひとりだち戦略

非ロシア人のモスクヴィッチ(モスクワっ子)は、どのような子育ての中を潜り抜け、どのようにひとりだちしてきたのか、そしてこれからどのようにひとりだちのシナリオを書き直そうとしているのか。まず問いの前半部をめぐって考察しよう。

革命後、非ロシア人は隔離されてきたわけでもなければ、また制度的に進学や社会進出を、民族性を理由に阻まれてきたわけでもない。しかし、この進学と社会進出のためには、本稿一で略記したように、母語や生活言語ではないロシア語をマスターすることが条件であった。革命後は民族エリートエリートの養成のために、非ロシア人青年の優遇措置がとられ、大学でロシア語を習得させてから専門を学ばせ、エリートに仕上げる方法がとられた。非ロシア人は学歴が長ければ長い人ほどロシア語化・ロシア文化化の影響力のもとにあった。かれらは母語である民族語を忘れず、ロシア語も習得してバイリンガルになった。革命後のモスクワで学歴をつみ、知識人として成功した人々を第一世代とすれば、第二世代であるかれら

の子どもたちの中には、民族語をほとんど知らないものが少なくない。これは異民族間結婚とも関係がある。すなわち、家庭での言語も、学校での言語もロシア語で、結局、母語は何かとたずねれば、ロシア語と答える非ロシア人モスクワっ子もかなり多いのが実態である。モスクワのタタール人の場合、ロシア語を母語とみなす者の割合は、三七％に達している<sup>(18)</sup>。

歴史的にも長く厳しい反発感情にさらされた民族であるユダヤ人のひとりだち戦略をみてみよう。ユダヤ人は<sup>ユダヤ</sup>ユダヤ(ユダヤ野郎)と、ロシア人などの他者によって差異化されてきた。ユダヤ人は少なくともこの差異化に對して三つの戦略で立ち向かった。一つはユダヤ人であることをカモフラージュするという試みである。その方法の一つが混血化である。ユダヤ人の混血率は旧ソ連邦内のエスニシテイの中で、ドイツ人に次いで高い。因みに、一九八八年の統計によれば、異民族間の結婚率は、ロシア人の男性が一六％、ロシア人の女性が一七・二％、ウクライナ人の男性が、三三・四％、同女性が三三・五％、ユダヤ人の男性が五八・三％、同女性が四七・六％である。ユダヤ人の中には、混血化によって民族性をロ

シア人として登録するものもいる。つまり、ユダヤ人であることを隠すという方法で、自らを位置付けてきた。すなわち、「……名指しから逃れようとする行為によって、その名の内実をも創り出して」きたのである<sup>(19)</sup>。

いまひとつは、結束し助け合うことである。「ユダヤ人組織の特徴は救援や福祉活動にある」といわれる<sup>(20)</sup>。世界的なユダヤ人組織もあり、世界各地に支援団体があり、相互に援助し合っている。かれらはさまざまな重要なポストにかれらの仲間がつけるように支援する。

さらにいま一つは、高学歴を媒介とした社会進出である。研究者、教育者、医師あるいは芸術家として成功しているものが多い。これらの比較的差別を受けることが少ない部門への進出を考えて、母親は子どもの教育に熱心であると指摘されている<sup>(21)</sup>。したがって、ユダヤ人には知識人が多いので、科学者間での競争において民族間葛藤を起こしやすい。

こうした、かれらの自己保存の戦略はリアクションをも当然生み出した。かれらの民族的アイデンティティの特質として、「抜け目がない」という形容詞が贈られたのである。民族性には、他者による差異化とそれへの反

作用としての処世術の両方をベースにした、他者による特徴付けという意味合いがあるようだ。

一九八九年から旧ソ連系ユダヤ人には、出国のために、隠していた民族籍を取り戻そうとする動きが見られる。

他方、ゴルバチョフ改革によって、「……ヘブライ語教育が、イーディッシュ語と並び、公的機関で許されるようになり、ユダヤ人を対象とした出版物の刊行や配布も可能となった<sup>(22)</sup>」。シナゴーグも再開された。

#### 四 非ロシア人における新しい発達文化の

##### 模索の兆し

エスニック・マイノリティにとって、学校にたよるひとりだちとは異なる、もうひとつのひとりだちの方図を編み出すことが重要なのではないか。こうした課題意識をもってアルメニア人、アゼルバイジャン人、チェチェン人などのモスクワの非ロシア人のライフストーリーの聞き取りを行い、タタール人のロシア人との関係史を追い、かれらが旧ソ連邦の中でどのようにひとりだちし、いまだのように新たなひとりだち戦略を立てているのかを追究している。その結果を仮説的に論じることとした

い。

エスニック・マイノリティとしての非ロシア人といっても、そのエスニシティによって宗教はさまざまで、しかも同一の民族でも所属の階級や階層によって宗教へのこだわり方は同じではなく、宗教も異なる場合がある。ロシア人との関係史も民族によってさまざまであることはいうまでもない。どこからどのようにしてモスクワに入ったかによって、さらにライフヒストリーによって、旧ソ連邦の制度化された発達文化にどのように馴染みにくく、どこは馴染みやすかったかが異なる。それは自前とされる発達文化と制度化した学校を中心とするひとりだちのシステムとの距離にもよる。そこで、いくつかのエスニック・マイノリティを選び、かれらのライフヒストリーを聞き取り、そこに新しいひとりだちの芽を読み取るように努めることとした。日常的な生活スタイルの中に発達文化のずれの克服の方法を読み取るために、かつ、そこから支配的な発達文化と折り合いをつけつつ同化されない新しいひとりだちの組み立ての一般化を、エスニシティなどの集団にかかわる特徴とともに引き出すために、比較の手法を取ることとした。

これまでの機会均等が制度的に保障された学校教育によるひとりだちの平等化は、その制度化された学校をひとりだちの主な手段とする発達文化をもつ人々（ある階級・階層、民族、性など）にとって都合のよいものであり、発達文化の異なる人々はよりよい生をもとめて、自らの自前の発達文化を変更して、はじめて平等に浴することができた。例をあげれば、生活言語とは異なる教授用言語をマスターするというような努力が必要であった。だから、発達文化の異なる人々が、支配的発達文化（現代社会ならば、知識のある質と量を、教師を介して伝達する学校教育に依拠したひとりだち）になじもうとすれば、国民教育制度はかれらのその志向を実現することをもって、制度化された教育の可能性、つまり長所を立証してきたのである。機会均等化は、こうして、画一化という側面をはらみつつ、競争ルールの平等な適応を可能にするものであった。この事態は体制をこえて共通していた。

モスクワに生きる非ロシア人たちも、この機会均等化のなかでひとりだちを遂げてきた。しかし、いま新しい事態に遭遇している。モスクワに生きる非ロシア人で革

命後の第一世代は、かつては周辺から中心部へ乗り込み教育の機会均等政策に支えられた人々で、成功した人も少くない(もちろんイデオロギー学習とその成果としての活動が成功をもたらしたという側面も否定できない)。かれらは同郷の人々を援助し、誇りと自信をもって生きてきた。しかし、その祖国が独立すると、モスクワに残るかれらはいわば取り残された人々にかわる。もちろん、生活の困窮からモスクワに出稼ぎにくる同郷の人々の援助をいまま惜しまないが。大ロシア主義も公然と自己主張される現在、モスクワの非ロシア人たちは、ロシア人にはなれず、いなならず、さりとて、祖国のネイティヴのように生きられず、まさに境界に生きる人々としての生きる力(「誇り、自信、やすらぎや癒し)を必要としている。それはいわば第三文化としての発達文化の創造が課題となりつつあるということである。いくつかの発達文化を知りつつ、いずれにもはまり込まないものを作り出さなくてはならない。既存のあるものにはまり込めば、二線級を余儀無くされるだけだからだ。オルターナティヴとしてのネイティヴになることを発達とする文化の構築が必要になりつつあるのである。モスクワのア

ルメニア人(定住者)を例にとれば、アルメニア人であることを選んでも、それは一つには、オルターナティヴとして、ロシア人ではなくアルメニア人となることであり、二つには、アルメニアに在るアルメニア人とは違い、ネイティヴであるのではなく、ロシア・アルメニア人というネイティヴになることである。<sup>(23)</sup> こうした自己決定とひとりだちがかなうためには、文化創造が必要である。できあいの文化を学習し内面化するのとどまらず、自分たちで共に文化をつくる必要がある。かれらは自分でそのように意識しているわけではないが、かれらの活動からはそれが読み取れる。アルメニア人の知識人サークルの活動を追う機会に恵まれた。かれらは、同胞のナゴルノ・カラバフ問題の講演を聞いてもあつくならず冷静に議論していた。かれらの語り口とその場の雰囲気からは、かれらなりの行動・判断様式の模索、共にいることが、刺激的で楽しく、何か新しいものが、そこにいる参加者の構成ゆえに生まれるという予感が漂い、批判的で創造的なのが生み出されうる予兆が感じられた。しかし、新しいものを生み出すための創造を目的とした肩肘のはった会合ではなく、まず集うことを楽しむもの

である。

このように、自己決定と文化創造のためには生涯学習が必要であり、関心を同じくする人々のネットワーク化が必要である。アルメニア人もタタール人もアゼルバイジャン人もそれをもっている。前者二者は特にディアスポラの民であり、祖国外にいる人々のネットワーク化にはたけている。

かれらの人間形成の過程は、同一民族だけで彩られているわけではない。類似した民族性のものが集うこともある。少数民族チェルケスの集いにチェチェン人が招かれ、アルメニア人とチェチェン人がホーム・パーティで闊達な議論を楽しむといった具合である。ネットワークは民族によって厳密に規定されているわけではなく、かなり自在に組まれている。一方では、祭りなどで自文化を常に確認しつつ、他方では、異文化者との共同の文化活動も組む。それは、創造的でありつづけるために、ある軸にはまらないために、必要なのだ。かれらはマイノリティであり、マジョリティとしてのロシア人と対抗する気持もなければ、とりたてての線引きを希望していない。祭りなどは、自文化への誇りと仲間の繋がりの確認

による安堵感をもたらすが、それだけではなく異文化者の間に仲間をつくる好機ともなるデモンストレーションでもある。

タタール人の祭りはモスクワ市民がよく知っている大きな祭りである。マジョリティにとっても、異なるものと一緒にいることに特別な違和感もなく、願わくばそれが楽しいとなる機会が多ければ多いほうがよい。自民族に対する自信に裏打ちされた地道な自己実現活動が実り、最近、モスクワではロシア人の中にタタール人に対する対等感が育っている。かつては3K労働の民族とされることもあったかれらが、タタルスタン共和国の独立性の強化を演出する政策も好影響を与え、ロシア人とは違っているが、しかし、共にモスクワ社会を形成する誇りをもった人々として、ようやくロシア人に対等な存在として受け入れられつつある、という。

もちろん、あるネイティヴになるためには、かれらが集う場が必要である。しかも民族間に緊張感がただよう社会のマイノリティには、癒しの風景とやすらぎの場が必要である。安堵感をともに感ずる場がやすらぎの居場所であり、美しさへの感性の共振が起こる風景がいやし

の風景である。それは心の奥にたたまれた原風景としての心象風景と共振する何かがあるということだ。アルメニア人にとって、アルメニア教会はまさにやすらぎの居場所であり、アルメニア人墓地はいやししの風景である。

民族学校や日曜学校は、非ロシア人が自民族の言語と文化を学ぶ機会を提供している。特に、後者には民族語を知らない世代が通っている。アルメニア人たちは両方の学校を持っている。先にも触れたように、二線級にならないためには、ロシア文化を相対化する必要がある、そのためにはロシア文化(言語を含む)を学びつつ、そこにはない何かをもつことが大切で、それが美しい自民族の言語ということは大いにありうることだ。しかも、それは第三文化の創造を共に進めるためにも求められよう。

もちろん、民族によって、世代によって事情は異なる。ディアスポラの民であるアルメニア人たちは民族学校を活性化させることに努めている。同じく離散の民であるタタール人はモスクワでまともな住むようになった頃からずっと民族語でタタール文化をおしえる学校にこだわり続けてきた。他方、アゼルバイジャン共和国では独

立後すみやかに学校の言語がアゼルバイジャン語になり、ロシア語の学校ははなはだ少ないが、モスクワのアゼルバイジャン人たちは民族学校をもっていない。

ともかく、いまモスクワでは、学校教育を相対化する学習・文化活動(人間形成の場)のネットワーキ化、しかも不定形で柔軟なネットワークと、大人と子どもの生涯学習とが、非ロシア人にとって楽しくかつ重要なときを迎えつつある。

- (1) Таракские Новости, No. 9 (43), 1997, C. 5.
- (2) 栗生沢猛夫「モスクワの外国人村」『小樽商科大学人文研究』第六九輯、一九八五年三月、五頁。
- (3) History of MOSCOW, Moscow, Progress Publishers, 1981, p. 58.
- (4) 栗生沢・前掲書を参照された。
- (5)・(6)・(7) Таракские Новости, No. 9 (43), 1997, C. 5.

(8) History of MOSCOW, p. 58.

(9) 一九九七年二月四日に、旧ソ連邦構成共和国のうち中央アジア部に位置する独立国家の代表者が参加する「中央アジア総合戦略セミナー」(日本国際問題研究所主催)が開かれたが、その際にも旧体制から引き継いだブラスの要

素として豊かな人材が指摘された。

- (10) 山内昌之『瀕死のリヴァイアサン』講談社学術文庫、一九九五年、三一—三三頁。
- (11) 表1は、岡田進『単一国民経済コンプレックス』の理念と現実』(『近代「ヨーロッパ世界」におけるネーションとエトノス』東京外国語大学、一九九二年、一八一頁)とH. X. СССР в 1989г. С. 35-36.とから作ったものである。
- (12) 拙稿「民族アイデンティティの形成」(『ロシア・ユーラシア経済調査資料』一九九八年三月号)、「ロシアに生きる非ロシア人のアイデンティティ形成」(『一橋論叢』第一二〇巻第四号)を参照されたい。
- (13) 加納格「連邦自治論の現在」(『ロシア研究』No. 21、一四九頁)を参照。
- (14) Независимая Газета, 11, 11, 1998.
- (15) 森岡修一「多民族の言語政策と教育の諸相」(川野辺敏監修、岩崎正吾・遠藤忠編『ロシアの教育・過去と未来』新読書社、一九九六年、三六五頁)を参照。
- (16) 加納格、前掲書、一五八頁。
- (17) 廣岡正久「民族主義路線」に回帰するロシア正教会』『ロシア研究』No. 21、一一〇頁。
- (18) Тарарские Новости, No. 9 (43), 1997, С. 5.
- (19) 浜本まり子「人はいかにして自らが生れ育った場所ので異邦人たりうるか」中内敏夫・長島信弘編『社会規範』藤原書店、一九九五年、九三頁。
- (20) 滝川義人『ユダヤを知る事典』東京堂出版、一九九四年、一九七頁。
- (21) 前書、二〇四頁。
- (22) 高坂誠「旧ソ連系ユダヤ人の現在」『現代思想』一九九四年、No. 22—8、一〇六頁。
- (23) 今福龍太「ネイティブになる方法」『クレオール主義』その後』(『民族の共存を求めて(2)』北海道大学スラブ研究センター、一九九七年)を参照。(一橋大学教授)